



生きるために 必要な紙

角幡唯介

極地探検だろーと登山だろーと、冒険の場においては装備は可能なかぎりきりつめるのが鉄則である。たとえば夢枕獏『神々の山嶺』のような小説をよむとそれがよくわかる。主人公の羽生丈二が前人未踏のエベレスト南西壁冬季単独（無許可）登攀に挑んだときは、登攀具や食料はおろか、記録のための鉛筆まで短くするという徹底ぶりだった。無論これは娯楽小説の話であるが、現実の登山家、冒険家たちも出発に際しては、どれが必要でどれが不要かぎりぎりまで軽量化に頭をなやませる。荷物が重くなるとそれだけパフォーマンスが落ちるし、ペーラスもおちて行動に余裕がなくなり、最終的に死につながるリスクが大きくなる。つまり冒険においては生きるために必要なものしか基本的には持っていかない。

極地探検の場合は櫛（すき）に荷物をのせて移動することになるので、軽量化は登山ほど厳密ではないが、それでも可能なかぎり無駄なものは省く。これを減らせば一日分の食料が五十グラム少なくなるとか、櫛の材料を松ではなく檜にすれば全体重量が五キロ減るとか、テントのペグを四ミリから三ミリのものにしようとか、予備のパンツはおいでいこうとか、大櫛なんか積載重量が全部で四百キロとか五百キロになるので、五キロや十キロ減らしたところで全然関係ないのに、それまでの習性か、どうしても無駄なものは削りたくなくなってしまつのである。

それだけ厳選した装備のなかに、それでもやはり紙類はある。ということはこの紙類は極地を生き抜くのに必須、とそこまではいかななくても、あつたほうが有利であると判断された紙類なのは間違いない。その選ばれし紙類は次の三種類。地図、ノート、文庫本だ。

地図は文字通り命にかかわる装備だ。地図を紛失すると現在地がわからなくなり冗談抜きで死にかねないため、私は予備もふくめて二種類持ち歩いている。ノートも地図におとらず重要だ。このエッセイをみてわかるように、私は探検をもとに原稿や本を書いてそれで生活



かくはた・ゆうすけ●ノンフィクション作家・探検家。北海道生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。同大探検部OB。『空白の五マイル』で2010年開高健NF賞、11年大宅壮一NF賞を受賞。18年「極夜行」でYahoo!ニュース|本屋大賞NF本大賞と大佛次郎賞を受賞。近著に「極夜行前」がある。

しており、妻子もその収入で暮らしているの、探検中にノートを紛失して原稿を書けなくなれば家族三人もろとも餓死という事態をまねきかねない。そして文庫本は悪天候時などにテントのなかで読むもので、これがなければ長時間の停滞にたえられず暇死するであろう。もちろん数百グラムもある代物なので、一冊に限定している。

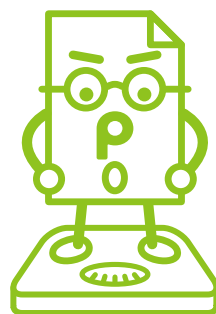
と、ここまで書いてあと一つ、重要な紙類があるのを忘れていた。トイレットペーパーだ。もちろんお尻をふくためのもので、量は行動期間一カ月につき一巻きである。できれば二巻き持っていきたいし、別に重くないので持っていけばいいのだが、つつい軽い軽量化のストイシズムゆえ月に一巻きに限定してしまつのだ。

最近では携帯ウォッシュレットなるものがあり、私も愛用しているので、こびりついた汚物の九割は水の噴射で除去できる。しかしどんなに便利なものが登場しても、仕上げの一拭きはやはり、あの、しんなりとした紙の感触がのぞましい。これだけは絶対にゆずれないのである。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

新聞紙だって、 ダイエットしている。

ひと昔前、1㎡当たり52gだった重さは、今や43gが主流に。新聞紙はこの30年間でなんと約2割も減量しているんです。これが人だったら…と考えると、大変さがわかりますよね。新聞紙の減量は、資源の節約や輸送費の削減、印刷のスピードアップなどにもつながっているんだって。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

<http://kamitsubu.com/>

今回は9月5日号、神田松之丞さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

Photo:Shiro Miyake